日本機械学会誌　2013. 07　Vol. 116　No.1136

TOPICS

ロンドンオリンピック2012の開会式に登場したブルネルをご存知だろうか？

1. はじめに

2012年7月に開催されたロンドンオリンピック2012は，本誌読者の方々もご記憶にあると思う．東京でも2020年にオリンピックを開催しようと招致運動が行われているが，競技ばかりでなく，開会式もオリンピックを盛り上げる大きな行事である．本稿では，ロンドンオリンピックの開会式の話題を寄稿する．

2. 開会式のはじまり

2012年7月27日，ロンドン時間午後9時前(日本時間28日未明4時)に，ロンドンオリンピックの開会式がスタートし，TVで放映された．BBCの開会式番組は，テムズ河の上流からロンドンまで，さらにロンドン西部に新設されたストラットフォード(Stratford)のオリンピックスタジアムに空からの映像が流れた．スタジアムの内部は，緑に飾られた田園風景と小高い丘がセットされていた．

午後9時，観客8万人を収めたスタジアムで，イギリスの自転車チャンピオンにより直径3メートルの大鐘（オリンピックベル）が鳴らされ，開会した．直後，静寂が漂い，イングランド第2の国歌「エルサレム」がボーイソプラノの少年により独唱され，会場に響いた．続いて，北アイルランド国歌，スコットランド国歌，ウェールズの讃歌が，それぞれの世界遺産の地から子供たちによるコーラスで捧げられた．イギリスは四つの地域・国からなることから配慮された演出であった．

そのときスタジアムには2頭の白馬が引く乗合馬車とともに黒いスーツと山高帽で正装した40名の男たちが駆け寄り，馬車から一人の男が降り（**図1**），中央の小高い丘に登り，演説を始めた（**図2**）．放送では，その文言はシェイクスピア作品の一つである『テンペスト』の一節であることを，その男が19世紀のイギリスのエンジニア，イザムバード・キングダム・ブルネル（1806-1859）であると伝えた．

上記のシーンは，開始から9分間の出来事に過ぎないが，「山高帽の男たちは何物？　シェイクスピアの『テンペスト』とは？　さらには，この開会式の演出は，どのような背景で作られたのだろう？　等々」の疑問は，日本人の多くに共通するものではないかと思われた．

3. フォーラムの開催

そうした疑問に応えるため，2012年10月26日（金）の夕方，東京・千代田区立日比谷図書文化館でフォーラム『ブルネルとシェイクスピアの「驚きの島々」―ロンドンオリンピックの開会式での演出を読み解く―』(http://www.brunel-spirit.net/img/hibiya.pdf) と題したフォーラムを，本会「技術と社会部門」の主催で，日英協会・イギリス大使館・千葉大学の後援で開催した．

内容は，開会式の演出に流れるシェイクスピア作品との関わりをシェイクスピア演劇の研究家・篠崎実（千葉大学教授）が，ブルネルの人物像をブルネル・スピリット研究会主査としての筆者が，ゲストとして参加頂いたKevin Knappett（イギリス大使館一等書記官）とTadeusz Stolarski（ブルネル大学名誉教授）がイギリスのオリンピック事情を語った．

4. 開会式を読み解く

開会式は選手入場も入れて全体で4時間に及んだが，ここでは前段の産業革命に関わる場面について述べる．開会式の演出は，アカデミー賞受賞映画監督，シェイクスピア劇演出家のDanny Boyle（1956-，56歳）が担当した．彼は，この行事を“Isles of Wonder”（驚きの島々）と名づけたが，それは，イギリスの誕生から産業革命，現在までの世界の経済発展と技術への貢献が表現されていると読み取ることができる．

“The Isles of Wonder”は，シェイクスピア作品『テンペスト』に登場する怪物Caliban（キャリバン）の“Be not afraid, the isle is full of noises”(怖がることはない，島は雑音でいっぱいさ）に典拠している．この一節を含むくだりが，冒頭述べたブルネルに扮したブラナーの演説である．オリンピックベルにもこの英文が刻印されている．

20分間にわたる産業革命での山場のシーンは，ブルネルが指導した蒸気機関・高炉・蒸気船などが会場に現われ，最後に溶鉱炉から流れ出てきた鋼を工場労働者たちが鍛錬し五輪の一つを作り出すパフォーマンスで，産業革命によって社会が混乱するが躍動する様子を演じた（**図3**）．それは，「雑音に満ちた驚きの島」としてのイギリスの様子を，世界の発展に貢献したイギリスの歴史に重ねて表現していると見ることができる．産業革命のシーンの主役を国民的の英雄としてのエンジニア，ブルネルに任せて演出したことは，

図1　乗合馬車から降りた山高帽の男

図2　ブルネルに扮したケネス・ブラナー

図3　五輪の一つを溶鋼炉から鍛錬する演出

イギリスの人々には何一つ異論が起きない人選と構成であった．

ブルネル没後152年を経ているが，彼の事績は，ブリストルのクリフトン吊橋，メイデンヘッド近くのテムズ河の鉄道橋・メイデンヘッドのアーチ橋，ポーツマスのロイヤルアルバート橋などとして今なお稼働し観光名所として活躍している．それは時代を超えて見通すブルネルのイノベーションとチャレンジの産業遺産でもある．

5. おわりに

この開会式では，女性参政権・医療保険制度・芸術など科学技術だけでなく，いち早く世界をリードしてきたイギリスの政治・社会的統制力をも，数千人のボランティアの参加によりエンターテイメントとして演出された．2020年に東京でもオリンピックが開催できれば，国民が自国に愛着を持てるようなストーリーの演出が行われることを期待したい．

(原稿受付　2013年4月30日)

〔佐藤建吉　千葉大学〕